《論　文》

第１回Youth Olympic Gamesがもたらすレガシーと戦略

荒井　宏和

Strategy and Legacy of the 1st Youth Olympic Games

Hirokazu ARAI

キーワード：ユースオリンピックゲームズ，文化・教育プログラム
Keywords: Youth Olympic Games, Culture and Education Program

Abstract

This research analyzed the strategies and legacy of the 1st Youth Olympic Games (YOG) based on the information available before and after the event.

The YOG, held in Singapore, were highly praised because it promoted the value of sports through its additional focus on cultural education program rather than focusing only on athletic performance expressed through medal acquisition as in the usual Olympic Games.

Moreover, various participating countries declared that they want to use the YOG as a part of the development / education of their next generation of athletes.

Finally, international conferences also reconfirmed the value of sports and that the concept of the YOG should be inherited in future Olympic Games.

１．はじめに

2011年８月に，第１回ユースオリンピック大会（以下，YOG）がシンガポールにおいて開催された。オリンピック史上初めてとなる本大会では，世界中の14才～18才になる最も才能のあるアスリート約3,500人が集い，日本を除く166ヵ国の放送局から中継された。それは従来のオリンピックとは異なり，特別な意味を込めた国際大会であった。

その理由の１つとして，現在社会的問題[1)]として若者に対するスポーツへの関心の薄れや肥満，健康問題，テレビゲームによるスクリーンシンドロームが挙げられており，この問題を如何に改善するかが課題となっている。この現状に対してYOGは，スポーツへの参加を奨励するだけではなく，「Excellence」，「Friendship」，「Respect」のコンセプトを広め，

積極的に経験させることを目標としている。[2)]

具体的な特徴として，文化・教育プログラム（Culture and Education Progrmme以 下，CEP）が挙げられる。選手やコーチは自ら競技が終了しても帰国することは許されず，このCEPに参加することが義務づけられた。ここでは，健康的な生活の送り方やドーピングへの恐怖，オリンピックの価値，アスリートとして社会的責任のある行動などについて理解を深め，ロールモデルとなるトップアスリートとの談話などの機会が創出された。それ以外に世界中の各国オリンピック委員会から推薦された30名のYoung Ambassadorや各大陸から選出されたYoung Reporterの起用も若者の関心を向上させる一翼を担い，彼らが実際に国際大会に関与したことを自らの言葉で世界中にメッセージが発信されたのである。

しかし，第１回のYOGが終了した現在，その経緯と実際にどのようなことが実施され，その後どのようなレガシーが生まれたのかについて考察する必要がある。これによって，国際スポーツ大会への関わり方やスポーツそのものの価値について考える一考察としたい。

２．YOG開催の経緯

YOGは，国際オリンピック委員会（以下，IOC）会長のJacques Rogge氏によって発案された。

1989年にヨーロッパオリンピック委員会の会長に選ばれたRogge氏は，当時東西に分断していたヨーロッパの若者をひとつに繋ぐ為にヨーロッパオリンピックユースデー（以下，EYOD）を考案し，14才～18才のアスリートを対象に1991年に自身の出身国であるベルギーのブリュッセルで第１回大会を開催した経緯がある。現在ではヨーロッパオリンピックフェスティバル（以下，EYOF）と名称を変えたこの大会は２年おきに開催され，夏と冬の大会が同じ年に行われている。1993年に開催されたEYOFに出場し，競泳男子100メートルでメダリストとなったオランダのPeter Van den Hoogenband選手は，７年後のシドニーオリンピックの同種目で金メダルを獲得している。EYOFをきっかけとしてRogge氏は，スポーツと教育をつなげた世界規模の総合競技会を開催することで，世界中の若者を繋ごうと考えた。

また，IOCの協力で17才以下のアスリートを対象に1998年にモスクワで開催されたワールドユースゲームズ（以下，WYG），オーストラリアで13才～19才のアスリートを対象に2001年より２年おきに行われているオーストラリアユースオリンピックフェスティバル（以下，AYOF）等の若者を対象とした国際総合競技大会がYOGの参考とされたと言われている。

そして，2001年にモスクワで行われた第112回IOC総会で第８代IOC会長にRogge氏が選出されたことにより，YOGの開催が具体化される契機となった。その後2007年４月７日に開催された第199回IOC総会（グアテマラシティ）においてYOGの開催が決定された。立候補都市は，アテネ，バンコク，モスクワ，シンガポール，トリノの５都市であり，モスクワとシンガポールが最終候補都市として選出されたが，結果的にシンガポールが開催都市に決定した。シンガポールは，開催予算が５カ国中最も低い予算だったが，政府による財政保証は他国とさほど変わりはなかった。また，狭い国土を強みとし競技会場がコンパクトに設置されていることや，国民に対する教育水準の高さが評価され

た（表１）。

３．若者に対するスポーツの価値の醸成

IOCは，若者に向けてオリンピックムーブメントを導きだすために２つの戦略を組み合わせた。それは，YOGを含む戦略とオリンピックの価値を広く認知させる戦略である。

まず，夏と冬のYOGを開催し，多くの若者に参加の機会を創出すること。次にオリンピックの価値に関する教育プログラムを多くの学校で実施する。またあらゆるメディアを通してオリンピックの価値について啓蒙するキャンペーンを全世界で展開する。そして若者がスポーツを通して自らが経験したことを共有するためのウェブサイトを開設し，「オリンピック・デイ・ラン」，「オリンピックスポーツ」，「教育」，「文化週間」などのイベントを通じて広く認知させることである。そのためには，オリンピックプログラムにMBXやスキークロスなど若者が興味を抱く種目の導入や男女ミックスゲームなど競技の統合をすること。また様々なメディアチャンネルを介して期間中に選手と若者の交流を促進し，若いエリートアスリートに対してスポーツに対する論理的なアプローチや高い価値観，スポーツそのものの本質について理解する機会設定した。そして自らの健康やドーピングの危険性や問題などについて考え，スポーツを通してその重要性について若者に対し教育することである。

表１　YOG招致各国の評価

	予算	財政補助	主な評価
トリノ	1億3000万ドル	イタリア政府とトリノ市が全体の72％を財政補助	・市の中心に競技会場が集中している ・国際大会の招致経験がある ・選手村の建設計画に高いリスクがあるとして懸念される ・2010年までの全てが完成する保証が低い
シンガポール	7550万ドル	政府が70％を財政補助	・シンガポール国立大学が資金を提供し、既存の大学施設を活用 ・高品質の宿泊施設を提供 ・会場までのインフラ整備 ・シンガポールの革新的でダイナミックな文化、教育プログラムは、YOGのコンセプトや目的を十分に満たしている
モスクワ	1億8000万ドル	モスクワ市が77％を財政補助	・輸送計画がYOG開催の用件を満たしている ・モスクワの長期的な戦略にYOG事業の妥当性を評価また、グローバルなデジタルリーチが、卓越したモスクワの文化や教育プログラムがYOGのコンセプトや目的を十分に満たしている
バンコク	3億3500万ドル	政府が82％を財政補助	・既存の競技会場を利用 ・国際的なマルチイベントスポーツ大会の開催経験あり ・選手村のレイアウトや市内のホテル数が充実 ・選挙の影響や交通（渋滞）など懸念される要因あり ・公共部門と民間部門のリーダーシップが不透明 ・タマサート大学テンシットキャンパスに選手村を設置 ・競技会場まで40分の時間は長い
アテネ	2億7300万ドル	スポンサーが59％を政府が32％を財政補助	・オリンピック発祥の地で第1回目のYOG開催を提案 ・ほぼ既存の施設や競技場を活用。ただし、24競技のうち5競技は新たに増設する必要がある ・選手村から各競技場には35分かかる

4．文化・教育プログラム

YOGのビジョンは，スポーツと文化，教育を統合するイベントとすることを主旨としている。前述したCEPはYOGのコセンプトをより確かなものにするにあたって不可欠な要素であり，全ての参加者にとって感動的な体験になることをねらいとした。この機会をとおしてアスリートを真のチャンピオンへと導き，オリンピックの意義を実現することにあった。また，CEPはオリンピックの意義を学び，どのようにすれば日常生活に反映できるかということを再認識するために次の項目について学ぶ機会を創出することになった。

a．オリンピズム，オリンピック・ムーブメント，スポーツ問題および地球規模の問題について

b．将来を自分自身で思い描くことによって自分の周りの人と環境に良い影響を与える

c．他の参加者との交流を通じ，新しいアイディアを学び文化に触れる

d．多様な文化と人々を１つにするオリンピック精神の力を実感することによって，オリンピックの意義，そして世界の文化の多様性を称える

以上の項目をより実現的にするためにCEPには，５つのテーマがあり，それぞれの内容は次のとおりとなる。

a．Olympism；現代に至るオリンピック競技大会の起源，哲学，構造，進化を辿る

b．Skills Development；自己開発，人生における過渡期の管理を含め，プロのアスリートのキャリアにおける様々な面を考える

c．Well-being and Healthy Lifestyle；健康的な食事及びスポーツをとおして，アンチ・ドーピングに対する考えを含む健康的なライフスタイルを推進する

d．Social Responsibility；自分自身のコミュニティーにおける責任あるメンバーとしての役割に対する認識を向上させ，環境及び持続可能な開発への貢献を通じ，責任ある地球市民となるためにアスリートがすべきことを考える

e．Expression；デジタルメディアの採用，及びユースオリンピック選手村内で行われるイブニングフェスティバルへの参加を通じ，学習及び交流を深める

そして，大会開催期間中に「Chat with Champions」，「Discovery Activity」，「World Culture Village」，「Community Project」，「Arts and Culture」，「Island Adventure」，「Exploration Journey」をテーマにした７つのフォーマットに沿った50以上のプログラムが実施された。

5．国連との協力関係

2009年10月にIOCは，国連総会におけるオブザーバー資格を得た。現在，15の国連基金とプログラム，特別機関がIOCと協定を結び，国連の「アジェンダ21[4)]」や「ミレニアム開発目標[5)]」を採択したりするなど，IOCは国連との関係を深めている。2010年５月には，初の国連とIOCフォーラムがスイスのローザンヌで開催され，途上国の問題等でお互いに協力することが話し合われた。

これを受けて，YOGに次の３つの機関が関与した。「国連の国際連合エイズ合同計画(UNAIDS)」は，HIV/AIDSについての注意をアスリートに喚起する為に，「健康で幸福

なライフスタイル」プログラムとして，現地シンガポールのNGOなどと協力してワークショップを開催した。また「国際連合環境計画（UNEP）」は，エネルギー消費と環境に関係する活動を提供。発電機の付いた自転車を漕いで携帯電話を充電したり，普通の電球と電力消費の少ない電球を比べたりするなどの体験ができるようにした。「国際連合児童基金（以下，UNICEF）」は，子供の権利と彼らが能力を開花する為に必要な環境について学ぶ為の活動やゲームを提供した。そして，YOG開催期間中，国連事務総長特別顧問（開発と平和のためのスポーツ担当）であるWilfried Lemke氏は，CEPプログラムを訪問し，UNICEFのワークショップにおいて「YOGは若いアスリートにとってスポーツの競技会を越えて，世界の問題に目を向ける貴重な機会である」と発言した。

６．大会期間中に各国のYOGに対するコメント

参加各国は，大会開催期間中にメディアを通してYOGに対するコメントを公式に発表した。これらのコメントには，従来オリンピック大会における国家間のメダル獲得数が重視される傾向よりも，国を代表する次世代のオリンピック候補選手に対して，YOGの文化，教育の要素を理解し，スポーツをとおして本来あるべきアスリートの姿をポジティブに捉えたと考えられる。以下は，各国のオリンピック委員会，選手団団長など重要なポジションである責任者から発信されたコメントをオープンソースによって収集した。

⑴　アメリカ

夏季オリンピックにおいて，メダル獲得国としては，常に上位にあるアメリカは，メダル獲得以外の部分でYOGの成功を評価した。

アメリカオリンピック委員会（以下，USOC）のScott Blackmunチーフエグゼクティブは，YOGに参加することによって，オリンピックムーブメントの一助になりたいと考えている。そもそも，USOCとオリンピックファミリーとの関係は，ドーピング問題やマーケティング収入などの問題から，必ずしも良好であるとは言えず，また，2016年オリンピック招致でシカゴが８千万米ドル（約70億円）を費やしたにもかかわらず，決選投票の第１回目で敗退したことがあった。

そのような中で，Blackmun氏のコメントでは，「我々がシンガポールにやって来たのは，IOCとの関係構築が目的ではなく，YOGがオリンピックムーブメントにとって重要なイベントであり，その一翼を担いたいと考えているからである。」と述べている。

また，YOGコンセプトの賛同者であり，「この大会では，皆がスポーツの側面だけに注目するのではなく，その価値についても注目するので，オリンピズムについて語る非常に良い機会である。」とし，さらに「子供達がオリンピズムとは何か，フェアプレイの精神，競技，自らの全力を尽くして競い合うことを確実に理解することがより重要である。」と述べた。さらに，Blackmun氏は，YOGは今後も継続するイベントとなったので，将来アメリカもYOG招致の可能性があることを示唆した[6)]。

⑵　中国

中国のYOG選手団関係者は，第１回YOGに出場する選手達にメダル目標を設定することを否定し，選手達が競技会とコミュニケーションの両方を楽しむことを期待していると語った。

中国選手団のCai Jiadong副団長は中国スポーツ当局が選手に対して，メダル数，金メダル数のいずれについても特定の目標数値を設定していない。

Cai副団長は，選手団と共にシンガポールに到着した際，「スポーツ局が選手達に対して，メダル目標を設定したという話は聞いていないし，今後設定する予定はない。今回のYOGに対して，国家体育総局としてもメダルターゲットは設定しない。」また，「YOGはこの年代の選手達にとって最高レベルのスポーツイベントであるため，我々の選手らが大会でベストパフォーマンスを発揮できることを願う。一方で，YOGは他のスポーツ大会とは異なる意味付けを持ち合わせており，選手達がベストを尽くし，オープンマインドを示してくれることをより期待している。」と語った。さらに，「1900年代に生まれた若い選手達は人生の黄金期にいるので，ここでの思い出は大事なものとなるであろう。彼らが競技会を楽しみ，世界中から集まる他国の選手達とコミュニケーションすることを楽しんでもらいたい。」と付け加えた[7)]。

⑶　ブラジル

ブラジルチームのAdriana Behar団長は，「シンガポールで開催されるYOGが2016年リオデジャネイロオリンピックで活躍が期待される若手有望選手の育成の機会となる」と述べた。

2016年オリンピック招致のアンバサダーでもあったAdriana Behar団長は，ユースオリンピックはブラジルの未来のスター選手にとって，マルチ・スポーツ競技大会で競い合うことができるということは非常に貴重な機会となると位置づけている。「2016年のオリンピックを開催するにあたり，ユースオリンピックは本当にいい試金石となる。ユースオリンピックの結果から，我々の選手のどこに改善の余地があるのか知ることができるため，非常に重要である。さらに新世代の選手にとっては，自身が2016年のオリンピックだけでなく，2012年ロンドンオリンピックをも視野に入れることができる機会にもなる。ブラジルにとっては，2016年に最高のアスリートを輩出するための準備の機会となる。また，選手は全員，勝ちたい，目標を達成したいと思っている。これに対し，ブラジルオリンピック委員会は全力で選手をサポートする。」と述べた[8)]。

⑷　ロシア

ロシアチームの選手は，96名の選手全員が17歳以下で構成され，30競技中２競技に出場する。このうち特に体操，陸上競技，レスリングでの活躍が期待されている。

ロシアオリンピック委員会のMarat Bariev エグゼクティブ・ディレクターは「今回が第１回目のYOGとなるが，選手は自身が歴史の一部となることを自覚している。我々はシンガポールに強豪チームを派遣した。選手の多くが各年代の世界選手権やヨーロッパ選手権でチャンピオンに輝いている。最高のパフォーマンスが発揮できるよう祈っている。しかし，大会はメダルを獲得することだけのものではない。」と述べた[9)]。

⑸　イギリス

イギリスオリンピック協会（以下，BOA）のColin Moynihanチェアマンは，「YOGは，教育やスポーツを通して若者の水準を上げる効果をもたらす。フィットネスや健康的なライフスタイルをもたらすだけでなく，オリンピックの価値や友情，尊敬といった意味を備えたスポーツの祭典になるだろう。」と述べた。さらに，イギリス選手団団長のJan Paterson氏は，「初めてのYOGで才能のある若い選手を参加させることができて，とても名誉なことである。私はシンガポールで，選手達がTeamGBのために自己新記録を達成し，そのためのスキルや決意そして誇りを見せてくれると信じている。ただしここで重要なことはユースオリンピックが，ただのスポーツイベントではないということである。マルチスポーツイベントに参加する素晴らしい機会を若いTeam GBの選手にもたらすことにより，世界から3,500人以上の競技者と共に生活し，競い合っていることを実感してもらいたい。」と述べた。１３一方，イギリスチームは，今回YOGに派遣する選手数を40名とした。これについて，BOAのAndy Hunt CEOは，チームメンバーが40名となったことについては正当な理由があり，いくつかの競技団体の関心不足によるものではないとした。「我々は40名の選手を派遣する。将来有望視される選手ばかりである。競技団体の中には，YOGの出場年齢カテゴリーでの競技会を設けていない団体もあり，選手を派遣していない理由の１つとなっている。また，ヨーロッパのライバル国は特にチームスポーツの競技力が高く，個人種目への出場が増えたことも，40名の選手を派遣することとなった理由である。競技団体の支援が得られなかったわけではない。全く選手を派遣しなかった競技団体はほとんどない。」と述べた。

2012年に夏季オリンピック開催を控えているロンドン五輪組織委員会のSebastian Coeチーフエグゼクティブは，若者に対して文化教育プログラムを継続したいと考えていることを表明した。「我々はシンガポールYOGと密接に協力してきた。私には，若者にどのようにアプローチできるかについて明確な考えがある。若者にアプローチすることは，我々にとって非常に重要なことだ。」とし，「ロンドンには若者の為の施設があるので，若者にとって魅力的な都市である。それは，非常に良いスタートポイントである。多くの若者が大会期間中の週末には，様々な理由でロンドンにやってくるであろう。我々がロンドンでやろうとしていることが，若者に貴重な経験を与えることを希望している。」と語った。

⑹　オーストラリア

オーストラリアオリンピック委員会は，この大会を単なる競技へのパスウェイだけでなく，若いアスリートが多くの経験をとおして準備をサポートする機会を創出するものであると位置づけた。YOGは，教育とオリンピックの価値，ライフスキル，そしてアンチドーピングの理念のようなものを含めた大きな要素を兼ね備えている。今後どのような方向に向かうか大変興味深いとして，今回のYOG参加に対して以下のミッションを掲げた。

a．オーストラリアのベストユースエリートを派遣

b．IOCが定める大会参加資格及びスポーツプログラムに則り，幅広い種目からアスリートを選抜

c．オーストラリアの若者達に，ユニークで記憶に残るオリンピズムへの導入の機会を提供
d．オーストラリアオリンピックチームへのアスリートパスウェイにおける重要なステップとなる経験を提供
e．オーストラリアの若者に一つのチームという環境の中にいることの価値について教育
f．安全な環境下で世界の種々の文化を共有し，これを歓迎する
g．初めてのユースオリンピックについて，メディアと若者とのコミュニケーションの成功を目指す

7．シンガポール国内の影響

シンガポール・スポーツ・カウンシル（以下，SSC）は，YOG開催へ向けた準備を支援するため，各中央競技団体（以下，NSA）は，620万シンガポールドル（約４億円）の基金を捻出した。この基金は，シンガポールにおけるユース世代のスポーツを活性化させるためのものとして，自治青少年スポーツ省（以下，MCYS），教育省，公営賭博管理庁の共同出資により，1,500万シンガポールドル（約10億円）の基金から拠出されたものであった。

競技団体はそれぞれ，２万シンガポールドル（約130万円）～10万シンガポールドル（約650万円）を提供されることとなり，さらにこれまでに過去３回，合計503万シンガポールドル（約３億3,000万円）が既に競技団体に分配された。

またSYSDは，資金支援の３分の１はYOG出場選手の強化のために活用され，政府によるYOGの予算は，１億1,300万シンガポールドル（約75億円）に追加された。その後，YOGに向けて70名のアスリート個人に対し，11万シンガポールドル（約700万円）の強化費が配分された。

YOGでは，国内の競技団体や選手だけでなく，参加する他国のアスリート６人に対してスカラシップを授与することとなった。このスカラシップは，YOGを通してIOCのスポーツに対する平等性やアスリートの教育の概念の一環として実施され，４年毎にヨーロッパ大陸，アフリカ大陸，アメリカ大陸，オセアニア大陸そしてアジアから各１名を選考することとなった。主催はRepublic's Community Development, Youth and Sports Ministry with operational support from the Singapore Sports School, Singapore National Olympic Council, the Olympic Solidarity and the Singapore Youth Olympic Games Organizing Committeeである。応募基準は13－15歳を対象とし，５つの国から選考され，さらに１名をシンガポール人とする。また，夏季オリンピック種目の水泳，陸上，バドミントン，サッカー，ゴルフ，セーリング，卓球の種目（最終的に，これらの競技団体からのみ申し出があった）から選考された。スカラシップの内容は，シンガポールスポーツスクールで専門コーチによるトレーニングと教育（４～６年間）を受けることができ，海外からの申込者には渡航費，英語圏外の選手のための英語研修，年間3,600シンガポールドルの強化費が与えられる。最終的に30カ国の各国オリンピック委員会から54名の応募があり，このうち６名が決定した（表２）。

8．南アフリカ会議での評価

2010年12月に南アフリカ・ダーバン市において第７回スポーツ・教育・文化に関する国際会

表２　奨学金序与者に対するプロフィール

名前	国/地域	年齢	競技種目	競技レベル
Ebineng Seabe Beryl	ボツワナ/アフリカ	13	競泳	・年齢別チャンピオン（ボツワナ国内） ・ボツワナ　ジュニア準スポーツ賞
Jevina Raydon Sampson	ガイアナ/南米	12	陸上競技	・200m,400m,800m国内チャンピオン（U12）
Angeline Tang An Qi	マレーシア/アジア	12	卓球	・2010年国際卓球連盟有望選手 ・女子個人優勝（ペナン州オープン） ・第22回マレーシア選手権（U13)3位
Nieto Herrera Janina Sofia	ペルー/南米	12	卓球	・2010年国際卓球連盟有望選手 ・女子個人優勝（ジュニア/カデットオープン）
Ang Wan Qi	シンガポール	12	卓球	・シンガポールU12女子トップ選手
Phiangkhwan Pawapotako	タイ/アジア	14	競泳	・2009年シーゲーム、2010アジア大会代表

議が開催され，筆者は当該会議に出席した。これは，同年開催されたYOGの評価に関するシンポジウム（テーマ：若者へのメッセージ）であり，各国のスポーツ担当大臣，国連関係者，アスリート，ヤングアンバサダーの立場でスポーツの問題点やスポーツの価値，さらにYOGや北京オリンピックの開催が国に対してどのようなレガシーを残すことができたのかについて，それぞれの立場からメッセージが発信された。その中で「テーマ：スポーツを通じた異文化間の対話の促進における若者の役割」では，世界の人口の18％を若者が占めており，国連は，スポーツ，教育，文化を通じて社会を超えて横断的に若い人々を結びつけ，異文化間の理解を促進するために重要な役割を担っているとした。また，グローバル開発課題におけるこの問題への認識が高まってきていることを捉え，「若者のための国際年2010」はそれに対し貢献できるように働きかけている。「文化交流のための国際年2010」と併せて，ユネスコはコミュニティーや人種間で起きる問題を解決する上で，スポーツの持つ力や潜在力を示すことを求めているということである。次に「テーマ：スポーツの価値に基づく教育の意義」では，「Excellence」，「Friendship」，「Respect」のコンセプトを実践的プログラムとして組み立てることによって，参加者に対して積極的な学習意欲を生み出し，尊敬される良い市民になるという意識に結びついたと評価した。スポーツと教育と文化の融合は，文化的交流を奨励し文化の多様性を促進する。初めてのシンガポールでのユースオリンピックを通じてこれらの３つのキーワードは結びつけられた。

最後にLambis V. Nikolaou氏（IOC Member

and Chairman of the IOC Commission for Culture and Olympic Education）より総括として本会議による声明文が以下のように発信された。

⑴ Youth involvement

a．スポーツ，教育そして文化に関する本会議では，若者の関わりに関する内容が，最も重要で革新的であると捉える。それは，本会議のテーマに対して真の意義を与えるものである。そして，これに関わった若者の参加は非常に重要である。彼らの熱心な発言は，彼らがどれだけこれに打ち込んだのかということの証である。また，注目すべきは，彼らの雄弁としたプレゼンテーションと明確なメッセージである。

b．本会議は，若者がオリンピックムーブメントの中で，将来的にフォーラムやカンファレンスに発展し，そして彼らが政策の実現に一役担ったり，スポーツムーブメントに対して全てのレベルに関わったりすることを推奨する。

c．本会議は，全ての政府に対して，国とコミュニティーを作り出すために，若者の育成に予算を出資することを呼びかける。

d．本会議は，若者の権限の委譲や自尊心の確立，価値と倫理の評価のためにスポーツのパワーを繰り返し行っていく。

⑵ The Youth Olympic Games

a．本会議は，文化と教育そしてポジティブなインパクトが初めてのYOGの成功を承認するものである。参加者は試合のプログラムによって動機づけられる。そして国籍や文化の間で生じる障壁を打ち破るという目的が達成された。

b．本会議は，YOGの精神が競技という枠を超えて広がることを期待する。

⑶ The Youth Olympic Games

a．本会議は，YOGの文化教育の本質を認め，スポーツ，教育そして文化における国際カンファレンスについて，オリンピック教育を伝える関係のように異なる存在のコラボレーションを認める。

b．本会議は，NOCが国同士の関係を構築すべきであることを推奨する。特にユネスコのNational委員会などのような非政府組織であり，学校のカリキュラムの一部に確実に導入すべきである。この関係は，それぞれの存在の特徴と責任を考慮するべきであり，スポーツと体育が，国の教育カリキュラムの一部として確実に認められる必要がある。

⑷ Technology and the future of Olympic education

a．本会議は，今日の若者に関してはコミュニケートする手段が急速に発展しており，特にソーシャルネットワーク，特に現代のメディアを通して「彼ら自身の言語」で表現する場合にだけ有効であるということを認知する。

b．本会議は，国と国内オリンピック委員会が，コンテンツクリエイターと現代の科学技術のユーザーとなる若者たちを奨励し，さらに若者のために強く主張しつつ，このような機会やツールへのアクセス方法を持っているIOCと他の国際機関の例を参考にすることを推奨する。

⑸　Olympic Values Education Programme

ａ．本会議は，オリンピックが教育としての価値ということに対して，子ども達の学習体験を高め，また若者やアスリートは，人生の中で人の価値というものを学ぶことができる，ユニークで貴重なプログラムであることを認める。

ｂ．本会議が成功するためのプログラムには，国の教育制度が普及という概念に関与することが必要であると考える。オリンピックの価値を考える教育は，IOCが作り上げたものであるが，政府がその価値を認め受け入れることによって，独自の教育プログラムに対する重要な付加価値として，理解する必要がある。

　ユネスコの存在は，世界的な規模から学校教育に導入する上で，貴重なパートナーといえる。ユネスコのネットワークを介してプログラムを紹介することは，IOCによる世界規模から見た新たな取り組みの可能性として考えられる。カンファレンスはまた，オリンピックコングレスが推奨する国連機関およびその他の関係機関との密接な関係を形成し，オリンピックムーブメントの本質を理解するための方法として捉えている。

⑹　Observatory and data base for education and development

ａ．本会議は，スポーツを通じて若者の教育を目的としたプロジェクトがあった。特にNGOは，発展途上国においては実施しているが，お互いに関係性を兼ね備えていなかったことを危惧する。知識やベストプラクティスを共有した場合，より発展的な効果が期待されるものである。

ｂ．本会議は，スポーツと教育，スポーツと文化のような全ての取り組みをデータベース化しウェブベースで利用可能となるように，他のパートナーとのコラボレーションを確立することを推奨する。このようなデータベースは，これらを共有するためにリソースが不均一にならないために，最も理想的プラットフォームである。

⑺　Educational programmes of the Organizing Committees of the Olympic Games

ａ．本会議は，IOCの要請により若者たちのために教育と文化プログラムを考案したことは，過去と現在のオリンピック組織委員会に対して多大な努力があったことを認める。しかしながら，多くのリソースが実践の場で行われながらも，いくつかの例を除外して，オリンピック後に終了してしまう傾向が危惧される。

ｂ．本会議は，オリンピックを開催したその国のレガシーの一部として，文化教育プログラムが継承されるべきであると推奨する。大会をホストする都市は，文化教育プログラムを継承すべきである。これらのプログラムは，可能な限り全体で共有し，オリンピックムーブメントに利用する必要がある。

⑻　Anti-doping，drug abuse and related education

ａ．本会議は，ドーピングの危険性について，特に選手や若い人たちを教育する国際連盟，ユネスコ，世界アンチドーピング機構などで啓蒙されている。また，ユネスコは，世界の全ての国がドーピングとスポーツに対して締約国として条約を結ぶように努力を続けている。

これは，条約を批准していない国々がこのままで良いとか，条約への署名をすること自体がそれで終わりということではないということである。

b．本会議では，社会的な問題として薬物に対する危険性や他の危険な行為について，若者への教育を推進する。

8．まとめ

今回のYOG開催は，次世代を担う若者に対するメッセージが加味されたものであった。スポーツを通じて社会に貢献できる方策を鑑みるうえで，参加国，開催国の双方にとってYOGのDNAが継承され，物質的ではない本来のスポーツの価値を問う貴重なレガシーを若者達に提供する契機となった。特にYOG初開催となったシンガポールについては，政府によるスポーツ政策が国民へ浸透させるインパクトを与える戦略性をもった大会となった。またIOCにおいては，オリンピックが掲げる様々な問題を次世代の若いアスリートに託すことを期待し，健全なスポーツ活動がYOGによって実践されたことによって社会貢献することが可能であることを立証したと言えよう。

最後に，ジャック・ロゲ氏がYOG開催にあたり参加者に発信したスピーチを引用する。「スポーツと身体活動を通じて，健康，自己概念，自信を身につけるために必要なスキルとアイディアを我々は若者に伝えることができる.スポーツへの参加を通じて，若者の自己形成の為だけではなく，我々が日々生活を送る地域社会の形成にとって大切な価値を若者に教えることができる。今回シンガポールに集まった若いアスリートは，既にスポーツに専心している者達だ.彼らがそれぞれの国で仲間に影響を与える一方で，YOGは彼らに様々なスポーツと文化に触れる機会を与える。私は，YOGが参加者ひとりひとりの可能性を広げることになることを確信している。試合に勝つにはゴールにいち早く到達するだけでいいが，（真の）チャンピオンになるには体の鍛錬だけでなく人格も磨かなければならない。」と述べた[10]。

今後の我が国におけるスポーツ政策の方向性を示すうえで，スポーツにおける真の価値がYOGに包含されていると考える。

参考文献

1）IOCのロゲ会長発案“青少年のオリンピック”（第１回ユースオリンピックがシンガポールで開催―IOCの新たな試み），スポーツファシリティーズ 39 (11), 34-40, 2010-09

2）YOG wins corporate support on strong social values and legacy, 154, pp57-58, Sportbusiness international

3）大津克哉；第１回ユースオリンピック競技大会（YOG）2010シンガポール報告―YOGの教育的側面から，東海大学紀要 体育学部(40)，177-183, 2010

4）アジェンダ21実施計画(97)―アジェンダ21の一層の実施のための計画；エネルギージャーナル社. 1997

5）開発教育実践学―開発途上国の理解のために；前林清和，昭和堂. 2011

参考資料

6）http://www.insidethegames.biz/youth-olympics/singapore-2010/10294-exclusive-us-will-measure-success-at-youth-olympics-in-more-than-medals-claims-blackmun

7）http://news.xinhuanet.com/english2010/china/2010-08/12/c_13442480.htm

8）http://insidethegames.biz/youth-olympics/singapore-2010/10273-brazil-hope-youth-olympics-will-be-big-stepping-stone-towards-rio-2016

9）http://www.morethanthegames.co.uk/other-sports/0611956-boa-chief-defends-decision-send-just-40-athletes-youth-olympics

10）http://www.olympic.org/en/content/Media/?articleNewsGroup=-1&articleId=96721